

きかにつき

## #21 帰家日記

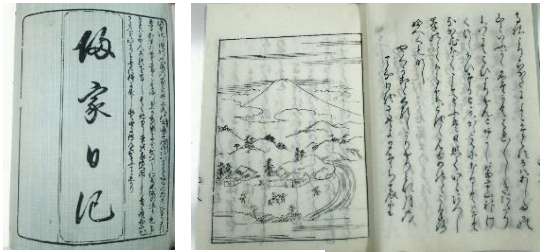
作者：井上通女（いのうえ・つうじょ 1660-1738）

成立：元禄2年（1689） 刊行：正徳6年（1716）

📖 解題

## ■ 内容

『帰家日記』は作者が仕えていた養性院の死去に伴い、江戸から東海道を經て讃岐国丸亀（現・香川県）に帰郷する際の旅の様子を記した



[915. 5/150]

紀行文。江戸の人々との別れから筆を起こし、元禄2年（1689）6月11日に江戸を発って、29日に丸亀に着くまでの19日間の道中を、和歌や漢詩を織り交ぜながら、細やかな観察力で記している。最後は、長旅を經て丸亀城が眺められるところまで戻りながら、満ち潮を待たねば帰れないもどかしさを記して執筆を終えている。

版本は、通女生存中の正徳5年(1715)から6年(1716)にかけて、貝原益軒などの紹介により、京都の書林柳枝軒から刊行された。版本に見られる跋文は、江戸で通女と親しい歌友であった長春院の子息で、幕府旗本の跡部良顯による、元禄庚辰(1700)仲秋日のものである。良顯は光海と号した垂加神道家でもある。

当館の所蔵本は、正徳6年丙申(1716)のもので、上中下の3巻から成り、最終ページに「洛陽書肆婆々岐惣四郎」と、販売所と見られる記名がある。

## ■ 作者

作者は井上通女。丸亀藩士井上儀左衛門本固(片桐且元の甥)の娘。幼名は振、のちに玉と改める、通、通女、晩年は感通、感通媪と称した。江戸時代

前期から中期にかけて活躍した女流歌人・漢詩人。

天和元年(1681)、22歳の時に藩主京極高豊の母養性院に召されて江戸に赴き、養性院の没する元禄2年(1689)まで約8年、主に文筆の才をもって仕えた。後に帰郷し、三田宗寿と結婚し三男二女をもうける。特に、三男、三田義勝は漢学者として大成し、丸亀藩儒と侍講を兼務した。

夫の没後の正徳4年(1714)長子宗衛に家を継がせ、自らは和歌を作り、典籍に親しんだ。享保20年(1735)から中風にかかり、病臥すること4年、元文3年(1738)に79歳で没した。

著作は、丸亀から江戸に向かう折の『東海紀行』、帰郷する際の『帰家日記』、歌集『和歌往事集』が生前刊行された他、後年発見されたという、江戸藩邸での生活を綴った『江戸日記』が現存する。他にも、『秋燈集』、『源語秘決聞書』、『古今序考』、『活囊集』など多数の著作があったが、焼失または散逸して現存しない。

## 📖 本文を読む

<翻刻>

「帰家日記」(『井上通女全集』井上通女全集修訂委員会編 香川県立丸亀高等学校同窓会 1973) [081.5/26]

「帰家日記」(『江戸時代女流文学全集』第1巻 古谷知新編 日本図書センター 1979) [918.5K/23/1]

## 📖 参考文献

「解説(四)帰家日記」(『井上通女全集』井上通女全集修訂委員会編 香川県立丸亀高等学校同窓会 1973) [081.5/26]

山口英恵「井上通女『帰家日記』論」(『学習院大学 人文科学論集』22 学習院大学大学院人文科学研究科 2013) [Z051/539]